

Title	平安和文における、鉤括弧と異文
Author(s)	加藤, 昌嘉
Citation	語文. 2008, 91, p. 78-85
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69121
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

平安和文における、鉤括弧と異文

加藤昌嘉

近年のバロック音楽の演奏家たちは、作曲家の自筆譜や異稿異版を吟味しながら、独自のリズム、独自のパンクチューエーションを以て、それぞれにユニークで過激な演奏を行っています。⁽¹⁾ 私ども平安文学研究者も、同じように、複数の写本に当りながら、それぞれの句読法を以て、本文を整理し、音読し、テキストを立ち上げます。

まず、一まとまりになる語句をはっきりつかんで、文脈を整理すること、それには、会話のことばばかりでなく、「と」や「など」で、「思ふ」「聞く」などに続いていく語句は、できるだけかっこに入れて考えること、また、並立関係のまつまりを考へること、複雑な文は簡単な文型を作って、それに合わせて考へること、時には「筆のそれ」がないかと考へること

(佐伯梅友「源氏物語「橋姫」を読む」『佐伯文法 形成過程とその特質』三省堂・一九八〇年)

「心に思うこと」や「引用のことば」も文である場合が多い。「中略」こうした文は、意味のうえでは続いていても、形のうえでは切れて独立しているわけだから、「かぎかっこ」(会話符、コーテーション・マーク)でつつむべきである。一般には、「対話の文」を会話符でつつむことだけが、広く行われているが、「心に思うこと」や「引用の文」も完結しているものは、かぎかっこでつつむほうがよい。解釈をするうえで、はっきりと考へることができからである。

(遠藤嘉基「対話と地の文との融合」『ことばと文法 解釈文法問題編』文教書院・一九五五年)

佐伯梅友や遠藤嘉基が述べる通り、私どもは、自ら句読点や鉤括弧を付すことによって、平安和文を咀嚼し、演奏します。句読点や鉤括弧は、のっぺらぼうの写本を読み解くための tool である、instrument である、と言えましょう。

私どもと同様、鎌倉〜室町〜江戸時代の読者たちも、朱点や傍

記を付すことによって、平安文学を分節し、理解せんと努めていた、と見られます。例えば、吉川本『源氏物語』夢浮橋巻末の奥書には「或以義理之相叶一切句点」と記されていますし、平瀬本『源氏物語』橋姫巻末の奥書には「校合書寫朱點了」と記されています。実際に朱によって句読が打たれている写本を挙げれば、古代学協会蔵の大島本『源氏物語』、大東急記念文庫蔵の『枕草子』、久曾神昇旧蔵の俊景本『うつほ物語』等々、枚挙に遑がありません。

すなわち、近現代文学における句読点・鉤括弧は、作者や編集者が付すものであるのに対し、中古中世文学における句読点は、読者や書写者が付すものである。……この基本的事実から、私は出発します。

一 「と」ナシ発話文・心内文

私は、鉤括弧を付すべきものとして、発話文・心内文・手紙文の三つを特立しています（和歌は、上記三つのいずれかに入りません）。「朗読をする際に、別様の声音を以て読む箇所」を、鉤括弧で包もう、ということですが。

具体的に検討してみましよう。以下、助詞「と」ナシで閉じられる発話文・心内文を挙げました。なお、本稿で掲げる用例はすべて、影印をもとに、私が、句読点・濁点・鉤括弧を付したものです。

【用例1】 宮内庁書陵部蔵・藤原定家筆『更級日記』（鎌倉前期写本）・八一ウ

かたみにいひかたらふ人、ちくぜんにくだりてのち、月の
いみじうあかきに、

「かやうなりし夜、宮にまいりてあひては、つゆまどろまず、
ながめあかいしものを。」こひしく思つゝ、ねいりにけり。

「宮にまいりあひて、うつゝにありしやうにてあり」と見て、
うちおどろきたれば、ゆめなりけり。

傍線部のごとく、「ながめあかいしものを」の下に閉じ括弧を付してみました。こうした文例は、平安時代の物語や仮名日記に頻出します。

【用例2A】 吉田幸一蔵・飛鳥井雅章筆・寛元四年奥書本『和泉式部物語』（江戸前期写本）・三二ウ、

たゞ月の影に涙のおつるを、「あはれ」と御らんじて、「など、
いらへし給はぬ？ はかなき事もきこゆるを、心づきなげに
こそおぼしたれ。」いとおしくて、のたまはす。

「いかに侍にか、心ちのかきみだる心ちのし侍て。〔以下略〕
『和泉式部物語』の一節です。こちらにも、助詞「と」がないので、「心づきなげにこそおぼしたれ」の下に閉じ括弧を付してみました。興味深いことに、この箇所には本文異同が起っています。三条西本の同じ箇所を挙げてみましょう。

【用例2B】 宮内庁書陵部蔵・三条西本『和泉式部日記』（室町後期）江戸前期写本）・三〇オ、

たゞ月かげに涙のおつるを、「あはれ」と御らむじて、「など、いらへもし給はぬ? はかなき事きいゆるも、心づきなげにこそおぼしたれ。いとをしく。」との給はずれば、

「いかに待にか、心ちのかきみだる心地のみして。」「以下略」
こちらには、助詞「と」があるので、括弧の閉じ位置が明白です。もしかしたら、【用例2A】と【用例2B】を見比べて、「いとをしくと」と「いとをしくて」の誤写に過ぎないんじゃないか?と思う向きがあるかも知れません。しかし、三条西本『和泉式部日記』という写本の性格を鑑みた場合、その可能性は低いと思われまふ。三条西本は、外題が「和泉式部日記」になっていることと、三条西実隆の書写らしいという憶測とによって、小学館全集や角川文庫の底本にされているものなのですが、この本は、伝本中唯一、鉤括弧の閉じ位置をはっきりさせようという意志に貫かれた特異な写本であるということを、私は指摘せずにはいられません。

【用例3A】 吉田幸一蔵・飛鳥井雅章筆・寛元四年奥書本『和泉式部物語』(江戸前期写本)・一九〇五

【前略】いでゝきにけり。」とぞあるを、「うれしくおはしますかな。いかで、いとあやしきものにきこしめしたるべかめるに、きこしめしなをされにしがな。」

みやも、いふかひなからず、つれぐのなぐさめに**おぼさるゝほどに**、あるひとぐきこゆるやう、

【用例3B】 宮内庁書陵部蔵・三条西本『和泉式部日記』(室町後期)江戸前期写本) 一八ウ

【前略】いでゝきにけり。」とぞある。「なを、いとをかしうもおはしけるかな。いかで、いとあやしきものにきこしめしたるを、きこしめしなをされにしがな。」と思ふ。

宮も、いふかひなからず、「つれぐのなぐさめに」と**おぼすに**、ある人ぐきこゆるやう、

【用例2A】と【用例2B】の違い、【用例3A】と【用例3B】の違いに留目して下さい。『和泉式部物語』諸写本には、助詞「と」ナシの心内文・発語文が複数存在するのですが、三条西本『和泉式部日記』では、そうした曖昧な箇所は、ことごとく、助詞「と」によって明確化されているのです。登場人物の心理を引用文として語る三条西本『和泉式部日記』と、他者の心内も地の文の中で説明せんとする『和泉式部物語』諸写本、という対比が看取できましよう。文章が明確であるという理由で河内本『源氏物語』を改竄本だと言いつる研究者たちが、その一方で、文章の整った三条西本『和泉式部日記』をオリジナルに近いと認定しているのは、滑稽な矛盾と言ふよりほかありません。

二 《…》心地す型心内文の気脈

私は先年、「と」の気脈」という拙論を発表いたしました。従来、「移り詞」とか「心内文と地の文が融合している」とか言われてきた箇所に強引に鉤括弧を付けてみると、次のアゝカのように

に、発話文・心内文を地の文にだれだませる独自の筆法が浮び上って来る、という趣旨の小論です。

ア「…活用語連体形」+やう 【例】「…いそぎつくらすべき」やうなど、くはしくいひをきたまふを、

イ「…活用語連体形」+よし 【例】「…つくしのかたへさそふ人にぐしてまかる」よし申したりし。

ウ「…活用語連体形」+まで 【例】「…くちをしき」までぞ思ひしられぬる。

エ「…形容詞連用形」+おぼゆ（おもふ） 【例】「…いとねたう」おぼゆ。

オ「…名詞化された形容詞」+をおもふ 【例】「…いとゞなみだのせきがたさ」をおぼせど、

カ「…活用語連体形」+心地す（次例参照）
【用例4】吉田幸一蔵・宝玲本『狭衣物語』巻二（江戸初期写本）

又、かゝるおもひしかさなりぬれば、あさましく、むねくるしきに、

「さりとして、たちまちに、うへの御心にしたがふべき」**心地**もせず、

「さて、此まゝにてやみなん。」**ともおぼえず**、
さま／＼にみだれまさりぬる御心の中、

拙論では、特に、『…連体形』+心地す型の内文が存在することを、【用例4】のような例を挙げて強調したのですけれども、諸氏から、違和感を表明する私信が複数寄せられました。改

めて、用例を検討してみたいと思います。

【用例5A】吉田幸一蔵・伏見天皇本『源氏物語』手習巻（鎌倉後期写本）・五三ウ

れいのかたにをはして、かみは、あま君のみけづり給を、
「こと人にてふれさせんも、うたてく」おぼゆるに、てづから、はた、えせぬことな（れ）ば、たゞすこしときくだして、

かゞみなど見たまふ。

「こよなく、おとろえにたりかし。をやに、いま一たび、かうながらのさまを、みずなりなむこそ、人やりならず、かなしけれ。いたくわづらひしけにや、かみも、すこしをちほそりにたる」**心ちすれど**、

なにはかりもおとろえず、いとおほくて、六尺ばかりなるすゑなどぞ、うつくしかりける。すぢなども、いとこまかに、うつくしげなり。

右の手習巻の文章は、中島広足以降、多くの研究者によって取り挙げられ、「心内文がいつのまにか地の文に移行しており、鉤括弧が付けられない」と称されて来たものです。しかし私は、強引に、二箇所、鉤括弧で包んでみました。

二行目『…うたてく』おぼゆる」は、前掲エの筆法。続く四行目の「かゞみなど見たまふ」は地の文で、以降、「こよなく、おとろえにたりかし」以降が浮舟の心内を叙した部分。それが、

「…をちほそりにたる」**心ち**」で閉じられつつ、地の文に移行する。…先の拙論では、そのように解しました。諸氏から頂戴し

た私信には、「そう捉えれば、鏡を見て己の憔悴ぶりを自覚する浮舟と、浮舟はなおも美しいと述べる語り手との認識のギャップがより鮮やかに浮び上る」と理解を示して下さるものがあつた一方、「鉤括弧を付すということは、これは直接話法なのか？」とか、「この段落全体が浮舟の心内文なのではないか？」とかいった意固地な異見もあって、閉口いたしました。

私は、次のように捉えています。すなわち、既存の浮舟の映画に即して説明するなら、傍線部「かみも、すこしをちほそりにたりから岩下志麻の声をその上に二重にかぶせ、「すれど」以降、岩下志麻の声に切り替わる、という音声処理をすればよいでしょう。或いは、心内文を赤色で、地の文を青色で印刷するテキストを作ってみるなら、「をちほそりにたる心地すれど」の部分を、赤色↓紫色↑青色と変化するグラデーションで印刷すればよいでしょう。鉤括弧とはサーモグラフィである、と言ってもよいかも知れません。

三 《…》型心内文の拒否

ちなみに、右で見た手習巻の一節で、いささかならぬ本文異同が発生していることにも注意しておきたいと思えます。

【用例5B】国立歴史民俗博物館蔵・歴博本『源氏物語』手習巻

(鎌倉末期写本)・五七ウ

わがかたにをはして、かみは、あまぎみのみけづり給を、

「こと人にてふれさせんも、うたて」おぼゆれど、てづからは、えせぬわぎなれば、たゞすこしときくだして、かゞみなどみ給。

「こよなく、おとろへにたりかし。おやに、いま一たび、かくながらのさまを、見えざらんこそ」と、人やりならず、かなし。いたくわづらひしなごりにや、かみも、すこしをちほそりにたれど、

なにはかりもおとらず、いとおほくて、六尺ばかりなるすゑなどぞ、うつくしかりける。

【用例5A】と【用例5B】との違いに留目して下さい。歴博本手習巻は、「心地す」を用いず、助詞「と」を置いています。心内文と地の文を截然と分けているのです。一四世紀の段階で、《…連体形》+心地す型の内内文に違和感を抱いた者がいた、ということに驚かされます。

右の歴博本手習巻の場合は、書写者による改変、と断じたいところですが、次のようなケースはどうでしょうか。

【用例6】天理図書館蔵『浅茅が露』(鎌倉末期写本)・五〇ウ

式部「出産間近の姫君の侍女」は、をそろしかんなることを、「我ひとり、たのもし人になりきこゑて、いかにしやるべき事にか？」とて、いできこえん事もくやくしく、思ひやるかたなき心ちぞする。

【用例7】天理図書館蔵『浅茅が露』(鎌倉末期写本)・六二オ

「三位の中將は」時雨がちなるころ、「あらしやまのもみぢ、

をぐらの山のごつゑ、さびしくなりぬらん。」**㊦**、ひさしく
まうで給はぬ心地して、「けふやゆかまし。」と、たゞずみあ
りき給ほどもに、

右二例のごとく、『浅茅が露』という物語にあっては、「心地
す」が出てくる直前に、助詞「**㊦**」「**㊧**」がきちんと置かれて
いて、「**㊦**：連体形」+心地す」型の心内文にならないよう工夫さ
れているのです。【用例7】では、ご丁寧に、敬語「給ふ」まで
付されています。

そもそも、「心地す」によって長い心内文を地の文になだれ込
ませる筆法は、『源氏物語』が創始したものと見られます。宇治
十帖に頻出するという偏差はあるものの、以後、『狭衣物語』『八
重葎』などに受け継がれています。

ところが、右の『浅茅が露』は、そうした曖昧な文章を拒否す
るかのように綴られています。作者自身が最初から「**㊦**：連体形」
+心地す」型の心内文にならぬように書いたのか、それとも、こ
の写本の書写者が右のように書き換えたのか、天下の孤本なので、
わかりません。いずれにせよ、先の歴博本手習巻の例と併せ考え
ると、一四世紀には既に、「**㊦**：連体形」+心地す」型の心内文を
使わずに文を構成する書き手がいた、ということは言えるでしょ
う。時代差よりも個体差に拠る問題と見られます。

四 名詞化される発語文・心内文

最後に、私が以前から興味深く思っ山括弧を付けている独特

の筆法について触れておきたいと思います。

【用例8】 島原図書館・松平文庫蔵『蜻蛉日記』中巻（江戸初期
写本）・六九才

めぐりて山なれば、へひるも人やみむ**㊦**うたがひなし。「す
だれ、まきあげて」などあるに、

【用例9】 大島本『源氏物語』梅枝巻（室町後期写本）・二〇ウ
あさみどりきこえごちし御めのとゞもに、へ納言にのぼりて
みえん**㊦**御心ふかゝるべし。

【用例10】 元和九年開板古活字本『狭衣物語』卷三之上・（江戸
初期版本）・二二才

「：おなじくは、人なみくゝにもてなして、かくさまぐゝに
もてかしづき給御方々のくさはひにもせんかし。」など、へせ
ちにひとにおとらじ**㊦**の御こゝろおきてにて、内まいるの事
などおぼしよりにけり。

【用例11】 島原図書館・松平文庫蔵『蜻蛉日記』中巻（江戸初期
写本）・一九ウ

「あすなむ」「こよひなん」とのゝしるなれど、我は、おもひ
しもしなく、へかくてもあれかし**㊦**なりたるなめり。

【用例12】 宮内庁書陵部蔵・藤原定家筆『更級日記』（鎌倉前期
写本）・八五才

あづまぢよりはちかきやうにきこゆれば、へいかなはせむ**㊦**
こゝ、ほどもなくゝだるべきことゝもいそぐに、

【用例13】 冷泉家時雨亭文庫蔵『後拾遺和歌抄』恋一・六四〇番

あふことのなきより、かねてつらければ、へさてあらまし」に、ぬるゝそでかな

いづれも、発話文・心内文を名詞化するがごとき筆法です。「へひるも人やみむ」の「うたがひ」や「納言にのぼりてみえん」の「御心」が典型例で、セリフ調の文を直接「の」で承け、「心」に続く例が大半を占めます。「蜻蛉日記」以降、物語や仮名日記で広く使われています。

これらを訳す際、諸注釈書は、「の」「に」を「〜という」に置き換えているようですが、私には、むしろ、現代語で言う「…的」：「…風」：「…式」：「…みたいな」等の口吻に近いように感じられます。例えば【用例10】であれば、「へぜったい人には負けまい」のご覚悟で」と訳したいところですし、【用例11】であれば、「へこのままここにいますわ」気分になった」と訳したいところです。

以上、拙論「⁽¹⁾と」の気脈」を物して以降に考えた問題につき報告いたしました。私の立場は、次の通りです。

すなわち、どこに鉤括弧を付けるのか決定することが目的なのではない。平安和文に無理矢理鉤括弧を付けてみることで、どうして現代人の感覚と齟齬するのかを考え、その気脈を汲み取り、違和そのものを整理本文の形で呈示すること。……それが目的です。

面白いことに、現代の注釈書で意見が割れている箇所は、中世の写本においても本文異同が発生しています。これまでの日本語研究は、作品（活字テキストのみ）を成立年代順に並べ、縦一直線の「文法史」「語彙史」を築いて来ましたが、今後は、一作品内の本文異同という横軸をも入れて考えるべきでしょう。通史とは異なる、「揺れ動きの文法学（解釈学）」が可能になるのではないか、と考える次第です。

注

- (1) 例えば、Jean-Christophe Spinozi 或は Enrico Onofri 或は Fabio Blondi 或は Andreas Staier 或は Eduardo López Banzo ……
- (2) 加藤昌嘉「と」の気脈―平安和文における、発話／地／心内の境―『詞林』40号・二〇〇六年一〇月
- (3) 前掲注(2) 拙論を参照のこと。
手習巻の当該のくだりについて、例えば、日本古典文学大系は「悲しけれ」までは、浮舟の心理描写であるが、地の文との区別の」とが、諸本、皆ないから、地の文として扱う。」と注しています（補注四九二頁）。また、東原伸明「物語文学言説の動態的分析」（源氏物語の語り・言説・テキスト）おうふう・二〇〇四年）は、「親にいま一たび…」に始まる浮舟の内話文は、いつのまにか地の文に移ってしまったことになるのである。」と述べています。前稿および本稿は、こうした見方に異を唱えるべく物されました。
- (4) 鉤括弧で包んだからといって、必ずしも直接話法と捉えているわけではない、ということば、佐伯梅友「会話の文などの引用」

『明解古典文法』三省堂・一九六九年)等によって、夙に説明されているはずなのですが……。

(5) 柿本奨『蜻蛉日記全注釈』(角川書店・一九六六年)は、セリフ調の文を受ける「の」が現出するたびに用例を挙げて解説を行っている、参考になります。

(6) 前掲注(2) 拙論で挙げ漏らした関連論文、および、それ以降に発表された関連論文を、列挙しておきます。最後の陣野論稿は、必読です。

鈴木日出男「心内語の方法」(『源氏物語の文章表現』至文堂・一九九七年)

中山真彦「作中人物または視点」・「作中人物または話法」(『物語構造論—『源氏物語』とそのフランス語訳について—』岩波書店・一九九五年)

中村幸弘ほか「文・文章と表現形式」(『正しく読める古典文法』駿台文庫・二〇〇一年)

小松英雄「仮名文の構文原理」(『仮名文の構文原理』笠間書院・二〇〇三年増補版)

東原伸明「物語文学言説の動態的分析」(『源氏物語の語り・言説・テクスト』おうふう・二〇〇四年)

陣野英則「作中人物の話しと語り手」(『源氏物語の話しと表現世界』勉誠出版・二〇〇四年)

竹内史郎「上代語における助詞トによる構文の諸相」(『国語学歴史研究会編『国語学歴史の研究』24 和泉書院・二〇〇五年)

西田隆政「文構造—「連接構文」をめぐって—」(『伊井春樹監修『講座源氏物語研究』8 おうふう・二〇〇七年)

山本登朗「学界時評 中古」(『国文学』二〇〇七年四月)
谷川恵一「自分の登場」(『歴史の文体 小説のすがた』平凡社・二〇〇八年)

陣野英則「言葉に関する「基礎」研究と「応用」研究」(上原作
和ほか編『テーマで読む源氏物語論? 本文史学の展開/言葉を
めぐる精査』勉誠出版・二〇〇八年)

※掲出した用例は、いずれも、影印をもとに私に翻刻を行い、私に句
読点・濁点・鉤括弧を付した、私の整理本文です。漢字・仮名の表
記は、底本のまま保存してあります。

※本稿は、平成一九(二)年度科学研究費補助金・若手研究(B)
「作り物語写本の残存状況と書写様態に関する研究」(課題番号
19720056)による成果の一部です。

(かとう・まさよし 法政大学文学部准教授)